

■ 書 評 ■

《脳とソシアル》 脳とアート ― 感覚と表現の脳科学

岩田 誠, 河村 満 ● 編

住友病院副院長・神経内科 宇高不可思



人は社会の中で生きており、それを担う脳は社会的存在でもある。脳の研究も個体の「生物脳」としての研究から「社会脳」の研究へと主流が移ってきた。岩田 誠先生、河村 満先生の編集になる医学書院の「脳とソシアル」シリーズは、このような潮流の中で“社会脳”をテーマとして扱った労作である。すでに刊行された3冊はいずれも医学の分野を超えた広範な領域の専門家によって執筆されており、一読するたびにその構成の巧みさと内容の面白さに感嘆したものである。第1弾の主題は「社会活動と脳」、第2弾は「発達と脳」、第3弾は「ノンバーバル・コミュニケーションと脳」であった。

今回新たに刊行された第4弾の主題は「脳とアート」である。「感覚と表現の脳科学」という副題に加え、帯には「脳はときどき嘘をつく」と意味ありげな言葉が書かれているが、読んでからのお楽しみとしよう。

I章の序論「脳にとって芸術とは

何か」において、芸術の起源、創造性の基礎、作業記憶の拡張、模倣と教育、芸術と宗教について、などが述べられ、続くII章とIII章の内容は、中心溝を境に後方より感覚情報が入力され、前方より運動情報が出力されるという脳の基本的構造に対応した、「感じる脳」と「表現する脳」に大別されている。II章の「感じる脳」では、脳と感性、色彩認知、絶対音感、香りの脳科学、味覚の脳科学と、視覚、聴覚、嗅覚、味覚に関する最新の研究成果が述べられ、最後に、これら五感を超越した、「バーチャルリアリティ」の脳科学が論じられている。III章の「表現する脳」では、アート教育、絵画と音楽の脳科学、遊びの脳科学についての章とともに、アートの決め手が脳のネットワークではないかとの論考や、芸術における時間の表現という難しい問題についての考察がされている。

どの項目も読んでみると、文系と理系の視点は見事に融合され、「目

から鱗」の感がある。私たちが何気なく暮らしている世界が人の脳という奇跡の賜物の複雑な働きによることを垣間見させてくれる。そして、人とは何か、自由意志とは何かという根源的な問題にまで想いを馳せるのである。

医学の効用は広範であり臨床分野にとどまらない。医療従事者はややもすれば日常の臨床業務に沈淪しがちであるが、最新の脳科学の目覚ましい成果にも目を向け視野を広げてみるべきことを痛感する。その意味で本書、ならびに本シリーズを、医師のみならず、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士など脳疾患の診療に関わる専門家の方々、さらには、脳と心の有り様に興味を持つすべての人々にお勧めしたい。

A5 頁272 2012年

定価3,780円

(本体3,600円+税5%)

[ISBN978-4-260-01481-6]

医学書院刊